

「^{むげ}無^{こうみょう}碍^{むみょう}の^{やみ}光^は明^{えにち}は無明の闇を破する恵日なり」

吉田 顕成

このテーマの言葉は、親鸞聖人が著された『教行信証』の冒頭にあります。「無碍」とは、何ものにも妨げられない、「無明」とは、真実の智慧の明るさがないということで、この一文の意味は、「何ものにも妨げられることのない阿弥陀仏のひかりは、真実の智慧がない人間の闇を破る太陽である」ということです。

私たちは、人間の「チエ」を精一杯はたらかせて、物事を判断し行動しています。その「チエ」とは、経済的な豊かさを求め、原発を知らず知らずのうちに支えてきた価値観であったり、それぞれの「宗教」の世界観であったりします。しかし、私たち人間の「チエ」によって物事を見通すといっても、本当に物事を見たことになっていないのではないのでしょうか。人間が精一杯考えた末の正義や善意であったとしても、そこには多くの問題があるのです。

それでは「真実の智慧のはたらきとは」と申しますと、ちょうど太陽の光がすべての存在に平等に降り注ぐように、どのような存在も分け隔てなく慈しみ、平等に尊重するものです。その真実の智慧のはたらきに人間が出会う時、自分の都合によって分け隔てをし、自他のいのちを傷付けている、人間の深い暗闇が初めて照らし出されてくるのです。

人間存在の奥底にある闇は深い。しかし、人間の闇がどれほど深いものであろうとも、朝日が夜の深い暗闇を打ち破るように、真実の智慧は人間の闇を破り、人間の問題を真に明らかにする大いなる働きとしてあるのだと、宗祖親鸞聖人は教えて下さっています。